

とだ しゅういち
戸田 庄一

●日本郵政グループ労働組合
(JP労組)・中央副執行委員長

JP smile プロジェクト (助け合い、家庭や地域でも)

唐突感もあった党首討論における11月16日の衆議院の解散。その週末と次の週末、地域の行事に参加するため新潟の自宅に帰った。

厳しい選挙である。その期間中ということもあり、いささか戸惑いもあったのだが、長野と東京での単身生活15年の身として、日ごろ地域の行事等に義理を欠いている手前もあり、参加することとした。

最初が、町内にある神社の掃除と冬囲い、次週が、共有林であり水源でもある山林道の道普請だ。地方も地方、田舎といわれる地域で暮らした経験がなければ、「道普請」の読みも意味合いもわからない方はいないか。

140戸弱、13組4町内の集落で、私の町内は2組21戸で構成されている。父に代わり地域の行事に参加して30年以上が経過したが、今もって貴重な戦力、若手の部類に属している。80歳を優に超えた女性も複数いる。独居老人宅が4軒、この秋にはその1軒がなくなってしまう。

集落の平均年齢と人口は、年とともに高くなり、確実に減少している。まさに「準限界集落」である。

日本の歴史上類のない大災害となった東日本大震災。その被害の大きさ、悲惨さとともに、これまでの尺度では計りきれない社会・環境への影響に、いまだ先行きが見えない深刻な状況が続いている。

一方で、震災直後からの救援・助け合い、

過酷な避難生活等での人と人との助け合い・絆の大切さ、地域社会の重要性があらためて認識された。

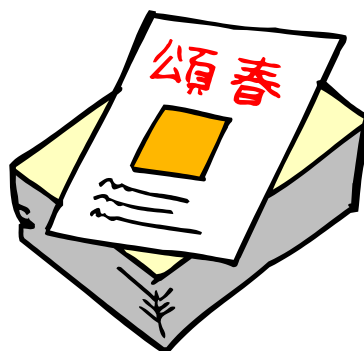
信じられないような劣悪な環境の中で助け合って生きる人々の姿に、多くの人たちが、私たちが失いかけている大切なものがあることを思い起こさせてくれた。

効率性と合理性、競争一辺倒の社会にあって、助け合う、協力し合うということが「できる」ことに、何か「ほっとした、安心した」のではないだろうか。まだまだ捨てたものじゃないと。

私が地域とのつながりを一番強く実感したのは、8年前の中越大震災の時だ。家族は車の中で過ごし、食事は近所同士で準備があった。ビニールハウスや大きなテント、鉄筋コンクリートで囲んだ車庫等で過ごした隣人・家族も少なくなかった。

誰言うともなく集まり、家事等を分担し、助け合い分け合って生活した。それらが自然に行われた。ビニールハウスで過ごした町内では、寝たきり老人の生活臭に苦情した大人が、若者にたしなめられたことがあったとも聞いた。

今あらためて思うに、田舎は、隣人同士のつながりや地域の行事が残っているから、いざという時、助け合うことが容易だったのかもしれない。ただそれだけではない。東日本大震災時にも、東京をはじめとする都市部で、深夜、徒歩で帰宅する人達に水やトイレ等の



提供が自発的に行われたと聞いた。

人は、「助け合う、協力する、そして役に立ちたい」との思いを誰もが持っていると思う。

J P 労組は、結成時から提案していた「福祉型労働運動」を、本年度から本格的な活動として展開することとした。「J P smile プロジェクト」としてその実践マニュアルを作成し、職場での展開をすすめている。

この運動は、労働組合の基本である助け合いの輪を、職場内にとどまるのではなく、家庭や地域といった領域にも広げていこうというもので、これまでは社会貢献活動として取り組んできた。

いくつかの取り組み事例を見ると、感心させられるものも少なくない。あくまでも提供を受ける側の思いを大切に、ということから、行政や社会福祉協議会、各種施設等と綿密な打ち合わせのもとで行っている。特に人と触れ合う取り組みでは、難しさが伴うようだ。反面、思いが通じたときの感動は大きい。取り組むたびに反省を生かした工夫もされている。

ただ、より多くはこれからで、始めは、大上段に構えるのではなく、自己満足や親切心の押し売りからでいいのではないかと思う。程度の問題ではあるが。

まず始めること。そして参加すること。体験することでそれぞれの心の中にある「何か」に触れる。優しさ・助け合いの気持ち、

誰かの役に立ちたいとの思いを組合活動として発露する場を提供するところから始めればいいと思う。

まだ緒についたばかり。「職場に課題も少ないのに」等の声があることも事実だ。試行錯誤しながらすすめることになるが、全国どこにも存在する J P 労組の特性も活かしたい。

また、この取り組みを通して、労働組合に付きまといがち「動員・強制」とのイメージを、「自主・参加型」に変えたい。

※ J P smile プロジェクトの「smile」は、5つの単語の頭文字で、sympathy（共感）、make（つくる）、idea（アイデア）、love（愛）、emotion（感動）です

新しい年は、冬囲いした町内の神社の中で迎える。大晦日・二年参りのロウソク当番・火の始末担当は、輪番制の「神社当番」の役割で、神様の前で老若男女ではない老々男々が朝方まで語り、飲み続けることになる。

語り合うことはどんなことだろうか。町内の行く末、12月上旬からの大雪の口説き、職場の不満・雇用不安、それとも総選挙結果後の政治談議になるだろうか。総選挙の結果は真摯に受けとめ、夏の参議院選挙対策に取り掛かろう。